

【投稿】

# タジク語でいこう

—言語と方言の間

井土慎一（いど しんいち）

このエッセイの題名は「タジク語でいこう」だ。そこで、さつそくタジク語について書きたい。

ところが実はすぐには書けない。だいたい「タジク」とは何だ。何を指すのか。そういう声がきこえる。そこでまずタジクという言葉について書き、その後タジク語の話を始めることにする。

このように書いたものの、これは難題だ。そもそも、タジクという言葉のおこりはいつか、またはどこか。これがわからない。その指すところなどはさらにわからない。これまで話がはじまらない。そこで、とりあえずタジクという語の歴史を追っていく。

## ■「タジク」史

歴史を追うといつたが、どこから追うか。少なくとも千年以上前から追いたい。

千年以上というとかなり昔だ。昔のことを知りたいときは漢字の史料が役に立つ。何しろ漢字には3千年を超える歴史がある。文字は世界でも珍しかった時代から、漢字はいろいろなことを記してきた。耶馬臺、すなわちヤマトの国についても記した。ヤマトに限らず、アジアの諸民族について記した。漢字の史料をひっくり返すとアジアで起こったたいていのことにはふれている。



そのような記録に「大食」という語があらわれる。タイショクとは読まない。これは現代の日本語読みだ。現代の中国語の標準語ではどうか。ターシーといった感じだ。しかしもう読まない。なにしろ「大食」が使われたのは昔の話だし、場所も北京ではなかつた。唐の時代。場所は文化の中心地だった長安あたり。「大食」の発音はタイショクでもターシーでもなかつた。ある推定によれば、ダイヂウクまたはタイシウクのようだつた。すなわち、「タジク」。これは「タジク」の記録に残るものの中でも古いものに數えられる。

それでは大食はなにをさしていたか。回教圏からの人をさしていた。これは当時は主にアラブ人だつた。わかつた。タジクはアラブ人か。このように簡単にことが運べば嬉しい。しかしある簡単にはいかない。誰も現在のアラブ人をタジクとは呼ばない。

そこで漢文以外の資料を漁る。すると、「タジク」についていろいろな説明がある。曰く「冠を意味する語から派生した」。曰く「アラブ」を意味する中世ペルシャ語にその源を発し、中央アジアのイスラム教徒を指すようになつ

た」。アラブ人が中央アジア人を指して使う単語として登場した」というものもある。説明の内容は食い違う。誰によつて使われたかなどの点で曖昧な説明もある。しかし「タジク」が中央アジア人らしいことはわかる。中央アジアとは現在ウズベキスタンやタジキスタンなどの国々がある辺りだ。

それでは、中央アジア人即ちタジク人だ。このように簡単にことが運べば嬉しい。しかしやはりそう簡単にはいかない。

大食が登場する7世紀から時代を数世紀下つた頃、中央アジアにはトルコ語に似たことばを話す集団とペルシャ語に似たことばを話す集団が多かつた。(いまでも多い。現在でも中央アジアの人口は大体この二種類の集団で成り立っている)このトルコ語に似たことばを話すほうが自分以外の人々をまとめて「タジク」と呼びはじめたらしい。

当時トルコ語に似たことばを話す人々にとつての「自分以外の人々」はだいたいにおいて、ペルシャ語に似たことばを話すイスラム教徒だつた。ここに、「タジク」の新しい定義ができた。「中央アジアに住み、ペルシャ語に似たこ

とばを話すイスラム教徒」というものだ。

言語、宗教、地理に基づいたこの定義が、現在もつとも一般的な「タジク」の定義の原型だ。この定義に適う集団は主にタジキスタンとウズベキスタンに住んでいる。ただし、現在の中央アジアには、主に16、17世紀にイランから移住してきたとされる、シーア派のイスラム教徒もいる。彼らのことばもペルシャ語に似ている。しかし彼らには「イラン人」という単語が使われることがある。彼らを「タジク」の範疇から除きたい。そういうときは、「タジク」の定義は以下のようにされうる。「ペルシャ語に似したことばを母語とし、スンナ派イスラム教徒で、中央アジア人。」

右では現在一般的に使われる「タジク」の定義を示した。しかし、もちろん「タジク」の定義は不变ではない。例えば、ソ連ではタジキスタン内の少数民族が、母語が何であるかに関わらず、公けには「タジク」として数えられたことがあつた。

前述の定義に適う者の自称がタジクであるとも限らない。自称が「タジク」である集団が既述の定義によるタジ

クであるとも限らない。例えば、中国領の西端にある塔吉克自治県やその近くの幾つかの町に住む集団の自称は塔吉克だ。彼等自身の発音ではトウヂク。中国政府による他称は塔吉克。要するに「タジク」だ。しかし、彼らの言語はサリクル語とワハン語だ。これらはペルシャ語とよくは似ていない。宗派はシーア派の一派であるイスマーメール派だ。よつて、彼らは前述の定義に拠ればタジク人にはならない。

ともあれ、「タジク」という言葉の定義については私達は前述のもので満足しておく。本当はもつと面倒だ。しかし、そこまでとやかく言うと本が1冊書けてしまう。この辺で打ち遣るのが良い。

### ■タジク・ペルシャ語?

前節ではタジク人のことばを長たらしく「ペルシャ語に似たことば」と呼んだ。このペルシャ語に似たことばは主にタジク人によって使われる。よつて簡単に「タジク語」と呼べる。以下ではタジク語と呼ぶことにする。

しかし、ここに問題がある。タジク語はタジク語と呼ば

れない場合がある。英語やペルシャ語の文献からの例を挙げる。例えば「タジク・ペルシャ」語。または曖昧な括弧つきの「タジク（ペルシャ）」語。「ペルシャ語タジク方言」などと呼ぶこともある。タジク語でも「タジク・ペルシャ語」（ザボニ・フォルシイ・トヂキー）という表現が使われたことがあった。これは何故か。タジク語はペルシャ語なのか。

タジク語とペルシャ語は「同系」だ。時代をさかのぼると同じ祖先にたどり着く。（それがタジク語の唯一の祖先だというわけではない。姉妹のようなものだ。タジク語とペルシャ語は大きくは異なる。通じないということはない。感じとしては東京弁と京都弁と思つてもいい。それではタジク語とペルシャ語は一言語の2方言か。それとも2つの独立した言語か。それが問題だ。

あることばが言語か方言かを決める基準がある。お互いに通じるか通じないかだ。たとえば日本語をオランダに行つて話す。通じない。その逆も然り。日本語とオランダ語はお互いから独立した言語ということになる。東京弁を長野に行つて話す。かなり通じる。その逆も然り。この場

合、東京弁と長野弁は一言語の2方言とされる。しかし、この基準は基準とすることばがひとつだけ決まつていてはじめてその意味がある。政府によって言語とされたことば2つが通じたらどうなるか。トルコのニュース番組でアゼルバイジャンのアナウンサーとの生中継による会話があつた。トルコ語とアゼルバイジャン語の会話になつた。トルコ側は特に聞き取りに苦労していた。しかし会話は成り立つていた。この場合、トルコ語とアゼルバイジャン語はお互いの方言か。

この例を見てもわかるとおり、前述の基準は、現実に言語の区分けをする場合にはあまり顧みられない。人為的にひかれた国境が言語の境という場合がかなり多い。別の言い方をすれば、あることばが言語か方言かは政治的に決まることが多い。この決定に宗教が関連することもある。このことを念頭において、ペルシャ語とタジク語を見てみよう。

ペルシャ語はイランの公用語だ。イランの国教はイスラム教のシーア派に属する。一方、中央アジアのタジク人が信奉するイスラム教は宗派が違う。スンナ派に属する。宗

派と国境がイラン人とタジク人を隔てている。16世紀始め前後からこつちづつとこうだ。宗派と国境の壁が500年間存続している。すると、壁の両側で使われることばの間の違いまで大きく感じられる。また、実際に大きくもなる。

### ■タジク語の成り立ち

この状況を身近に感じてみるため、日本に置き換えてみよう。例えば、静岡あたりに国境線をひいてみる。国境がひかれる理由はなんでもいい。平将門が関東に張った威が続いたとしてもいいし、室町幕府の覇が静岡以東に及ばなかつたとしてもいい。宗派も違えてみる。静岡以西の「関西国」は浄土宗を国教にする。静岡以東の人々は主に日蓮宗を信奉する。500年ほどが経つ。「関西国」では京都弁を基礎にした国語、「関西語」が制定される。静岡以東では東京弁をはじめとする諸方言が話される。こうなると、「ほかす」と「捨てる」の違いが方言の違いというよりも言語の違いのように感じられてくる。関西語と関東語だ。さらに、関西国は主に西欧から外来語を仕入れる。静

岡以東はソ連に支配される。その結果、関東語は主にロシア語から、またはロシア語を通して語彙を借り入れる。関西語と関東語の間の違いはますます目立つようになる。

右記の描写で関西語をペルシャ語、関東語をタジク語に置き換えてみる。かなり強引な対照だ。しかし、こうするといべルシャ語とタジク語の関係がなんとなくわかる。たとえば、関西語話者が関東（語圏）に来て買い物をする。「ごめんやす。」

「おっ、旦那、関西国人だね。」

「ビフテキおへんか。」

「ビフシユテクスかい。ウジエ（もう）はけちゃつたな今日は。」

「氏家？」

「ロシア語の外来語が増えちやつてね、やんなつちやうよ。」

「ロシアンが増えてしもたんか。そらあかんな。」

「ちげえねえ。からつきしだ。ア（でも）、どうにもしりも言語の違いのようだ。」

「なむあみだぶつ。」

—なむみようほうんげきよう。

といった会話が交わされるようになる（かもしれない）。このような状況で、関東語、否、タジク語を一方言として扱うか一言語として扱うか。この選択は政治的立場の表明にもなりうる。なかなか厄介だ。

少なくとも名称の点では、最近の趨勢ははつきりしている。一言語としての名称、即ち「タジク語」の勢力が増している。（この名称はタジク語でザボニ・トヂキーマまたは簡単にトヂキー、英語ではタジクとなる。英語では最近タジキが登場した。）「ペルシャ語タジク方言」や「タジク・ペルシャ語」——これらは主に西側のイラン文学研究者によつて使われた表現だつたが——は最近減つたようだ。

世の中にはややこしいものもある。そう達観するよりほかない。

のまんまんなかにあるだけあって、いろいろな集団がやつてくる。アラブ人がイスラム教を持つてきたり、モンゴル人が征服しに来たり、ロシアが支配しに来たり、スターリンが様々な民族を強制移住させたりと、とにかく落ち着かない。ペルシャ語に似たことばを話す集団がいるところに、トルコ語に似たことばを話す集団が押し寄せてきたりもする。2言語や3言語併用も普通だ。集団間の線引きもなかなか難しい。始終新しい線が引かれたり、古い線がぼやけたりしている。

世の中にはややこしいものもある。そう達観するよりほかない。

本稿では「タジク」と「タジク語」という名称の使用について書いた。簡単に端折つて書いた。それでもこれだけの長さになる。実にややこしい。

### ■ややこしき中垂

【注】アフガニスタン、イラン、タジキスタン及びウズベキスタンで使われる南西イラン語をそれぞれダリー、ファールシー、タージーと呼び、「ペルシャ語」をこれらの包括的な呼称として使用する文献もある。

(シドニー大学言語・文化学部／言語学)

しかし、これは仕方がない。中央アジアはなにしろ大陸